

満州縦断 三度の命拾い

東京都 村津弘次

一 生い立ち

私は大正十(一九二二)年七月二十日に東京府南葛飾郡寺島村(現在の東京都墨田区向島)で生まれた。父は弘造、明治二(一八六九)年生まれで無職、明治十四年生まれの母、孝が封筒貼りの内職をして一家の生計維持をしていた。

私は南葛飾郡奥戸村(現在の東京都葛飾区)の上平井尋常小学校を昭和九(一九三四)年三月に卒業し、(父はこの年の一月に脳溢血で亡くなっていた)奥戸尋常高等小学校高等科へ進学したが、翌年の九月、家庭の事情で二年生で中途退学し、芝新橋の知人が経営する坪居ガラス店に住み込みで働き、この間にステンドグラスの技術を習った。昭和十一年、あの二・二六事件の直後、ガラス店を辞め家に帰った。

二 青年期、左手指の負傷

昼は納豆売りなどして生計を支え、夜は上平井青年訓練所で軍事教練を受け、ラツパ手をやり、入隊直前まで続けた。

その後納豆売りを止め、葛飾区上平井町にあった、懐中電灯を造る町山製作所に勤務していたが、昭和十二年十月下旬、パープレスという機械で左手人差指第一関節、中指第二関節から先を欠損するという事故に遭った。それから二年くらの後、同会社を辞め近くの理研工業木根川工場に勤め、鋸の歯を造る歯切部で働いた。

昭和十六年五月二十二日には、宮城前で挙行された青年学校生に対する天皇陛下の御親閲にも参加したし、有楽町の日劇前、朝日新聞社前での国防献金街頭募金をやり、三宅坂の陸軍省へ届けるなどの活動をした。私は当時の軍国青年であった。

三 徴兵検査、入営

昭和十六年秋、東京本郷連隊区司令部で徴兵検査を受けたが、左手指一部欠損のため、徴兵官か

ら「これでは兵科の兵隊には採れない」と言われ
て、「第一乙種合格、現役衛生兵」と決まった。

同年十二月末入営のため、理研工業木根川工場
を退職、また上平井青年学校研究科も修了となっ
た。

昭和十七年一月十日、広島市西練兵場に集合し
て現役陸軍衛生兵として入営し、即刻宇品港を出
航して釜山に上陸、列車で京城（ソウル）、元山、
図們、牡丹江を経由して満州国滨江省一面坡（イメンパ）
に着下車、ここに駐屯している独立守備隊歩兵第二
十七大隊（満州第三三八部隊）に入隊、三カ月間
の基本教育を受けた。

四 陸軍病院初年兵時代

昭和十七年四月八日基本教育を終了し、ハルピ
ン第一陸軍病院（満州第七部隊）へ原隊復帰、以
後六カ月間衛生兵としての教育を受けた。この間、
古兵からひどいビンタを受けた。また、以前ラッ
パを吹いていたというのでラッパ手を命じられ、
起床、消灯のラッパを吹いた。九月に教育終了し

て、調剤室勤務を命じられた。

五 兵技教育隊へ派遣

昭和十七年十一月、ハルピン郊外の孫家（ソンジャ）にある、
初年兵に戦車・自動車の修理を教育する関東軍第
二兵技教育隊（満州第三六六部隊）へ派遣され、
その医務室に勤務して、病理試験・衛生試験検
査を担当することになった。

昭和十九年六月一日、再び病院へ原隊復帰した
が、このとき派遣先部隊の中隊長杵形大尉から感
謝状を、原隊の病院長嘉悦軍医少将からも褒状を
授与された。これは派遣先部隊で徹夜で結核菌検
査を実施したことを賞されたものと思っている。
同年七月一日付で衛生伍長に任官し、第一内科に
勤務することになった。

六 陸軍病院下士官時代

昭和十九年十一月、「お母さんの身体具合が悪
いようだから一度家に帰るよう」と福島教育隊
長から休暇が許可され、十一月中旬ハルピン発の
釜山行き直通急行列車で東京に向かった。家に帰

つたが、母は特に悪くはなかった。休暇を許可してくださった教育隊長の温情だったかと、後に感謝したものだ。

休暇中に本郷の南山堂へ医学書「内科診療の実際」を買いに行き、帰途B 29による第一回の東京大空襲に遭遇した。B 29は一万メートル以上の高度を飛ぶので肉眼ではほとんど見えず、また日本軍の高射砲弾は八千メートルくらいまでしか届かなかった。

十一月二十八日、母に別れを告げて東京出発、往路と同じ経路を経て十二月一日ハルピン着、帰隊した。

七 鉄道司令部へ転属

昭和十九年十二月三十日、新京の関東軍野戦鉄道司令部へ転属、同日ハルピン支部付を命じられ、部下数人を連れて再びハルピンへ戻り、満鉄ハルピン鉄道局庁舎内の同支部に入った。

昭和二十年六月十五日、同司令部錦州支部へ、さらに山海関停車場司令部へ派遣された。ここで

北支、中支から満州、朝鮮へ移動する四個師団と軍司令部の兵員に対して、ペスト予防接種液交付の任に当たっていたが、七月一日付で衛生軍曹に進級した。山海関にいる間、歌手渡邊はま子一行の慰問があり、聴きに行ったこともあった。

同年八月九日、ソ連軍、外蒙軍が全満州に侵攻を開始、同年八月十五日、山海関憲兵隊で天皇陛下の終戦の放送を聴いた。雑音がひどくてよく聞きとれなかったが、日本が無条件降伏して戦争が終わったことを知った。すぐにこれからどうなるのか、どうやって日本に帰るのか、ということを考えて。

当時全満州一带に大雨が降り続き、平地は水浸しになっていて、ソ連軍戦車隊は鉄道線路上を侵攻したために、レールは曲がってしまし、満人の運転手が逃げたりして事実上鉄道は不通となり、ハルピンまで戻ることができなくなった。

錦州支部で武装解除を受けた。そのころになると、満人の暴動が伝えられて、宿舎にはバリケ―

ドを構築した。その後、私だけ錦州飛行場に行かされて、そこでソ連軍の捕虜になった。

八 捕虜生活（列車で北上）

昭和二十年十月、有蓋貨車に乗せられ錦州飛行場を出発、どこへ連れて行かれるのか分からぬまま、やがて新京で下車、南嶺收容所に入り編成替えが行なわれた。私は新京第一梯団に編入された。南嶺に二日ほどいて再び有蓋貨車で新京出發、どこへ行くのだろうということについて、車中の噂話では日本に帰されるとか、いや中央アジアのタシケントという所へ連れて行かれるとか、いろいろな話が飛んでいた。列車はやがてハルピンを過ぎ、さらに北に向かっていることが分かった。これで日本に帰る望みは絶望的となった。緩化で病院の同年兵滝口弥惣治君と会った。途中、ソ連兵が列車に乗せてきた牛を射殺して解体するということもあった。列車は北安、孫呉、瑗琿を過ぎ、終点黒河に到着、そこで下車させられ、我々は日本人の官舎だったらしい南嶺收容所に入った。

九 收容所生活始まる

この收容所にいる間に何回か命拾いをしたが、そのうち一回は仲間十五人と使役に行く途中、向こうからソ連兵二人が満一人を間に挟んでやってきて、「ストロイ（止まれ）」と言ったが我々は止まらなかつた。すると、ソ連兵はいきなりマンダリン銃（七十発ぐらい連射できる自動小銃）を向けてきた。距離は四、五メートル、彼らはすぐに撃つことを知っていたので、瞬間「これは撃たれる！」と全身の血が引くような恐怖を感じたが、幸い撃たれずに済んだ。

收容所での仲間が、苦しみだした。詳しい病名は覚えていないが、七転八倒の苦しみ方であった。医療囊に携行していたモルヒネ錠を一錠投与し、まもなく症状が治まるということもあった。

昭和二十年十二月四日ごろ、黒竜江岸にあった牡丹江製材所跡の收容所へ移り、ここで風退治のための衣服消毒と、入浴代わりに各人バケツ一杯のお湯が配られた。こんな体験は初めてであった。

ある日井戸へ水を汲みに行ったとき、気温は実に零下四十二度、しかし風がほとんどなかったのが幸いであった。極寒地では、特に風と湿度に注意が必要であることは教えられていた。極低温のため室外の大便所の穴は深く掘っておくが、便は直後に凍ってしまうから、上へ上へ重なって円錐状に尖るので、うっかりするとお尻を刺す危険があった。穴の中に入って山になった大便を壊すという作業がある。カチンカチンに凍っているので、匂いなど全然ない。たたき壊した便は畑に運んでおけば、春には立派な肥料になるという。

昭和二十一年二月ごろか、ソ連軍女医による身体検査があり、健康度を等級から四等級に分け、「一、二等級は重労働に耐えられるものとしてシベリア送り、三、四等級は病弱者、身体障害者で、重労働に耐えられないものとして満州に残す」ということであった。私の検査では、最初は「一等級」と言われたので、黙って左手を机の上に出したら、途端に「ニエツト！（駄目だ！）」といって

四等級にされ、シベリア送りを免れた。何が幸いするか分からない。

入ソする部隊を、対岸のブラゴベシチェンスクまで救護班として軍医と一緒に、凍りついた黒竜江を渡ったことが一度あった。

その後、江岸収容所から元の南崗収容所に戻った。この南崗収容所にいる間に、死体埋葬の墓穴を掘る作業に出たことがあった。それは黒河の対岸、ブラゴベシチェンスクから日本兵の死体六体ぐらいつつを馬車に積んで、収容所近くの小さい松林に運んでいるのを毎日見ていたが、この死体をそのまましておく、野犬が引つ張り出すので埋めなければならない。その墓穴掘りに出かけたのだが、穴の大きさは、二百体ぐらいを埋葬しなければならぬので、凍っている地面を、オガクズなどを燃やして、凍土を溶かしながら掘っていくというものだった。掘りながら松林の方を見ると、何というむごいことか。カチンカチンに凍った真っ裸の遺体が、乱雑に積み重ねられていた。

とても正視できない凄惨な情景で、「おれは、とてもこんな所では死ねない！」と痛感したことだった。

十 黒河から南下、北安へ

昭和二十一年三月末、我々は南下することとなる。といつても、ソ連軍が鉄道のレールなどをみんな持ち去ったため、歩いて行くしかない。私は黒河第一梯団に編入された。人員は約六百人以上だった。病弱者と荷物は馬車に載せ、動ける者は徒歩で北安までの約三百キロメートル、小興安嶺を越えて行くのである。第二梯団三百余人は、それから一週間後に出発した。第三梯団は、国民党遊撃隊の挑発に乗って六月二十二日に暴動を起し、三百人から四百人ぐらいが撃たれたり、捕まったりして処刑されたりして命を落とし、かろうじて生き残った者も鶴崗炭坑などへ送られた。鶴崗炭坑へ送られた人の中でほんのわずかな人が、脱出に成功して帰国しただけである。これが、いわゆる黒河事件である。私が第三梯団に編入されていた

らどうなっていただろうか、と思っただけで冷や汗が流れる。

第一、第二梯団は黒河から黒龍江沿いに南下、瓊瑋、孫呉、小興安嶺を越え龍門に着いた。ここで宿泊する予定だったが、宿泊はおろか食事も休憩もできず、さらに引き続きぶつ通しでの夜行軍となった。私は空腹の上、疲労が重なってついに倒れてしまった。意識がもうろうとなってきたとき、「村津さんじゃないですか」と、私の名を呼ぶ声を聞いた。見ると名は忘れたが黒河收容所の同じ部屋にいた人であった。この人に助けられて、狼におびえながらやっと馬車に追いつき乗せてもらった。これが第二の命拾い。

次の宿泊予定地、龍鎮に着いた。途端に三十九度の発熱。「アッ！ やられた！」と思った。それは黒河出發直前に同室の者が入院するので付き添いに行ったとき、入院患者の衣服からはい出した虱が、ベッド一面にはい回っていたのだ。寝ている患者の白衣の中は、虱で満杯だったからだ。潜

伏期間を計算して、そのとき発疹チフスに感染したに違いないと思った。携行薬袋から強心剤「ビタカンファー」を取り出して、自分で皮下注射し体力を持たせた。龍鎮で一泊、次は北安の手前で藁わらの中に潜って一泊、その翌日やっと目的地北安に到着した。そのとき体温四十度。直ちに入院と決まった。

入院した病院は、終戦後、孫呉と北安の陸軍病院が合併して北安駅近くに臨時に開設したもので、建物は旧日本軍の兵舎であった。従って看護婦もいた。診断の結果、病名は「発疹チフス」、症状は足腰が立たず、便所に行くにも銃架につかまってやっと歩く状態、目は辺り一面に砂をまいたように見える。治療薬はリンゲル、カンフル、安息香酸ナトリウムくらいしかないとのことであった。何日かして症状が少し良くなったと思ったら、また高い熱が出る、マラリアに似た症状で、半月ごとに四十一度くらいの高熱が周期的に繰り返された。病室はもともと軍隊の兵舎だったので、二段

ベッドになっており、熱が下がると上の段に上げられ、熱が上がると下の段に降ろされるということの繰り返しだった。耳たぶから採血されたのは、多分血液の塗抹標本を作って染色して検査したものと思う。診断は「回帰熱」、薬らしい薬がないのでどうするかと見ていたら、俗にいう赤チンで、二パーセントマーキュロクロム液を数回静脈注射されたが、結果はこれで治癒した。再発もしなかった。マーキュロは水銀剤で、回帰熱の病原体は梅毒と同じ系統のスピロヘーターなので、梅毒の特効薬「サルバルサン」が適薬だが、手に入らない。梅毒治療の際、このサルバルサンと併せて水銀剤、蒼鉛剤を併用していたのを、部隊の医務室勤務で知っていたから、水銀剤のマーキュロを使ったのは納得した。戦後水俣病の事件が起こったとき、マーキュロは公式には製造販売を禁止されていた。

回帰熱で苦しんでいるとき、夕方右隣の患者が死んでいた。翌朝、目が覚めたら左隣の患者も死

んでいた。いつ自分の番がくるのかと生きた心地がしなかった。熱が高いと、高熱で粟や高粱の食物が苦くてなかなか食べられないが、無理にでも食べないと体力がつかないで死を早めることになる。白米などなかなか手に入らないから、私はまづくても我慢して食べるようにしたので、回帰熱もやつと危機を脱した。これが三度目の命拾い。

十一 北安駅で

昭和二十一年八月、北安からさらに南下することになり北安駅に集合。いったん客車に乗ったがみんな降ろされ、東北民主聯軍いわゆる満州の八路軍の兵士がそれぞれの顔色を見て強そうな者と弱そうな者に分け始めた。「ここで残されたら、いつ日本に帰れるか分からない！」と直感した私は、兵士が私の目の前にきて、ポンと肩を叩いたとき、さつと弱い方に入ってすぐに客車に乗った。この兵士は、どうも日本人のようだった。後で分かったことだが、日本兵で八路軍の捕虜になった人が大分いたと、本で読んだり人の話を聞いたことが

ある。

十二 ハルピンへ、帰国が決まる

列車は北安を出発、その日のうちにハルピンに着き、駅構内の信朋收容所シンポウに入った。ここにいる間に、中国とアメリカの間で日本人の送還についての交渉が行なわれ、「中国側が必要とするもの（留用）以外は、全員日本へ帰国させる」ことが決まった、という情報を聞いた。私は本部員だったので、乗船名簿を書く仕事をしていたが、私の身分が軍人であることを隠して、ハルピン市民として住所も日本人が多くいた地段街ジダンガイと記入した。

十三 引揚げの途に着く

昭和二十一年九月一日、引揚列車に乗車した。幸い客車だった。乗車前に持ち物検査があり、私は以前に休暇帰郷中に買った医学書を持っていた。検査員がこれをペラペラとめくって見ていたが、このときはヒヤヒヤした。もし衛生部員であることを感づかれたら、留用間違いなしだからである。国共内戦で、八路軍は旧日本軍の衛生部員を非常

に貴重なものとしてほとんど留用していたからだが、幸い何も言われなかった。

思い出多いハルピン駅を出発し、京浜線陶頼昭^{トウライシヨウ}を過ぎ、第二松花江を渡って松花江駅で下車した。多くの引揚者の話を聞くと、大部分の引揚列車は第二松花江の手前で停車、みんな降ろされて舟で松花江を渡ったというから、私たちの場合は幸運だった。

この時期は、蒋介石の国民党軍と毛沢東の共産軍との間で、いわゆる国共内戦が続いていた。私たちが南下するころは、一時停戦中だった。

松花江駅で八路军軍から国民党軍に引き継がれたが、その国民党軍のひどいのは驚いた。九月一日の夜、国民党軍から「女を出せ！」という要求をしてきた。ハルピンの市民が大部分だから、もちろん女の人もいたが、まさか女の人を出すわけにはいかない。困ったが、結局はみんなから万年筆や時計などを集めて提供し、何とかその場を切り抜けた。こんなひどいことをする国民党軍だか

ら、規律正しく我々をよく守ってくれた八路军に負けるのは当たり前だと思つた。松花江駅からは無蓋貨車に乗せられ、煤煙や雨に悩まされながら長春、瀋陽、錦州を通過、錦西で下車、ここで乗船までの待機所、集中営に入った。ここでコレラ患者発生、九月二十四日錦西集中営出發、葫蘆島埠頭着、引揚船に乗船した。船はアメリカの戦時標準船リバティ型V O九十九号であった。翌九月二十五日、葫蘆島を出發、四年九カ月にわたつていろんな苦勞を重ね、三度の命拾いをした思い出多い満州をあとにした。

十四 上陸、祖国の土を踏む

昭和二十一年十月はじめ、博多港外着、またまた船内にコレラ患者発生、港外で待機、十月八日やっと博多港に上陸した。いろいろな手続きを済ませ家に電報を打とうとしたら、係員に「電報より列車の方が早い」と言われ、へえーと驚いた。引揚列車に乗車、被爆一年二カ月後の広島を通過の際、このころはまだ原爆について詳しく知らな

かったが、七十年間草木も生えないと聞いていた。車窓から見えたのは、焼けトタンのバラック小屋が点々と建っている程度だった。

翌十月九日夜東京着、そぼ降る雨の中を、や々と我が家に到着した。まさに生還であった。持ち物は毛布一枚、医学書一冊、若干の医薬品、履いてきた履き物は、北安の病院で死んだ患者の地下足袋であった。やっと帰った我が家は空襲の被害も受けず、年老いた六十五歳の母が何とか元気で待っていてくれた。

終戦後、ソ連軍の捕虜となって祖国に生還するまでの間、何度も生死の境をくぐったが、それでも南方や中国本土の戦場、シベリアに抑留された方々、そして満州朝鮮から体一つで引き揚げてきた人々の労苦に比べれば、私の苦勞など足元にも及ばないと感じている。

十五 帰国後の生活、仕事

我が家に帰ったときは、栄養失調で体力もなく職を探すのも大変で、電車に乗るにも人を押して

乗る力もなかった。そこで思いついたのが、軍隊で習得した衛生試験検査の技術を生かそうと思い、東京都衛生局へ相談に行ったところ、中央区築地明石町の中央保健所に欠員があるからと同所を紹介してくれ、昭和二十一年十二月四日付で東京都中央保健所職員として採用されて、検査室勤務となった。検査室には、草間さんという係長が一人いた。以後中央保健所に二十二年四月勤務し、昭和四十四年四月江戸川保健所へ転勤、昭和五十七年三月勲奨退職、翌四月一日より同保健所非常勤職員として検査室勤務、昭和六十一年三月規定により退職、保健所検査室勤務は延べ約四十年に及んだ。なおこの間、東京都職員労働組合の役員と同組合保健所支部の役員を十年余りも勤めた。

江戸川保健所退職後、東京都江戸川区松江の日本衛管指導センターに就職、高圧蒸気による医療廃棄物の滅菌業務に従事、平成元（一九八九）年六月末体調不良を感じ退職、年金生活になった。

昭和二十五年三月に結婚した私には、四人の子

供がいて、皆それぞれに成人し自立している。戦前から村津家の大黒柱として、人には言えぬ苦勞をしてこの家を支えてくれた母は、昭和三十二年六月に七十六歳の長寿を全うし、家族に看取られてこの世を去った。勤めを辞めても後顧の憂いはなく、妻と四人の子供で平和な余生を送っている。

十六 私の幸運

最後に、私が現在あるのは人差し指を潰して欠損したことが、後々私の人生に大きな影響を及ぼしたものと思っている。何がその人の運命を変えるか、それこそ神のみが知るであろう。

その一

徴兵検査で衛生兵になったこと。もし歩兵・砲兵など兵科の兵隊に採られていたら、東京出身だから第一師団に編入されていたのではないかと思う。その第一師団は二・二六事件後の五月に、北滿の果て孫呉地区に移駐していたが、昭和十九年八月南方に移動、フィリピンのレイテ島で米軍と激闘、一万三千五百四十二人の内、戦没者一万二

千七百四十二人、生存者八百人、生存率四パーセント（大岡昇平著「レイテ戦記」による）ということ、私も当然戦死していたであろう。

その二

黒河でのソ連軍女医の身体検査の結果によっては、シベリア送りは免れなかったかもしれない。シベリア抑留者は概数で六十万人余り、その一割がシベリア凍土に埋められているという。シベリアへ抑留されていたら生きて帰れたかどうか。

その三

在隊中、私の担当した業務が当時の軍隊用語では「病理試験」といい、現在の「衛生試験検査」である。この技術を習得したおかげで、帰国二ヵ月後に地方公務員として長期の失業にならず、生活の基盤を安定させることができた。人生の岐路は至る所にある。私が選んだ路は幸福につながった。